

「つたえること・つたわるもの」№189

日本の「オノマトペ」は日本の「感性」を表した「からだことば」である

健康ジャーナリスト 原山建郎

前回に引き続き、『たのしい日本語——おもしろくことば その1』講座の配布資料から、オノマトペ（擬音語・擬態語）のトピックを紹介する。

かつて、武蔵野大学の授業「コミュニケーション論」（図書館司書選択必修）で、私が電車の中乗りポスター（当時）で見つけた水にまつわる「ことば（動詞）」を紹介して、これらの「ことば」から生まれるオノマトペ（飲む：ごくごく、撒く：ザパーッなど）を書かせたことがある。

のむ、まく、くむ、こぐ、ひたす、あらう、こぼす、わかす、たらす、もぐる、およぐ、ぬらす、うかぶ、そそぐ、かける、ためる、ながす、うつ

（「東京都水道局のエッセイ募集」1997年）

これらの「ことば（動詞）」を漢字で記せば、【飲む、撒く、汲む、漕ぐ、浸す、洗う、零す、沸かす、垂らす、潜る、泳ぐ、濡らす、浮ぶ、注ぐ、掛ける、溜める、流す、打つ】のようになる。

自然界の音や物音を表す「擬音語」には、焚き木の燃える音の「パチパチ」、雨が「ざあざあ」降る音などがある。その用法のいくつかを挙げてみよう。

▲がたがた 戸ががたがた揺れた／客が店員にがたがた文句を言う／寒くてガタガタ震える

▲からから 缶をふるとからから音がする

▲がらがら 地震で塀ががらがら崩れた／泣いている赤ちゃんをがらがらであやした

▲がんがん がんがん工事をする音

▲ごろごろ 雷がごろごろ鳴った／猫がごろごろ喉を鳴らす

▲ざあざあ 水道の水をザアザア流した／外はざ

あざあ降りの大雨だ

▲どんどん 太鼓をドンドン叩く／ドアをどんどん叩く音がする

また、日本語のオノマトペで、鳥の鳴き声、動物の鳴き声には、次のようなものがある。

▲鳥の鳴き声

ガーガー（あひる）／ホーホケキョ（うぐいす）／カッコウ（かっこう）／カーカー（からす）／ケンケン（きじ）／チュンチュン（すずめ）／ピーヒョロロ（とんび）／コケッコウ（にわとり）／ポッポ（はと）／ホーホー（ふくろう）／テッペンカケタカ（ほととぎす）／ホロホロ（やまどり）

▲動物の泣き声

ワンワン・キャンキャン（いぬ）／モーモー（うし）／ヒヒーン（うま）／ケロケロ・ゲロゲロ（かえる）／コンコン（きつね）／ニャーニャー（ねこ）／チュウチュウ（ねずみ）／ブーブー（ぶた）／メーメー（やぎ）

このような「擬音語」を英語では、どう表現するだろう。『オノマトペ 擬音・擬態語をたのしむ』（田守育啓著、岩波書店、2002年）に、いくつかの英語オノマトペが出てくる。

quack-quack（がーがー）、alf-alf（わんわん）、choo-choo（しゅっしゅ）、glug-glug（ごくごく）、chug-chug（ぼっぼっ）、oink-oink（ぶーぶー）、sputter-sputter（ぱちぱち）

英語でも、同じ要素が繰り返されている反復形もあるが、むしろ、次のように音が一部変化した反復形の方が一般的である。

click-clack（かたこと）、clip-clop（ぱかぱか）、flip-flap（ばたばた）、ding-dong（ごーんごーん）、hip-hop（ぴよんぴよん）、slish-slosh（ぱちやぱちや）、

tick-tock (ちくたく)

(『オノマトペ 擬音・擬態語をたのしむ』「オノマトペの使い方」78～80 ページより抜粋)

「国立国語研究所」HP に載っている「日本語を楽しもう」内のコラム「擬音語・擬態語にはどんな種類がある？」に、5 種類のオノマトペがあると書かれている。(太字は原山)

「ごろごろ」「しんなり」などの言葉は、一般に「擬音語・擬態語」または、「擬声語・擬態語」とも呼ばれていますが、これらはそれぞれどう違うのでしょうか。また、日本語の「擬音語・擬態語」にはどんな種類があるのでしょうか。

まず、音を表すもののうち、人間や動物の声を表す「擬声語」と、自然界の音や物音を表す「擬音語」に分けました。次に、音ではなく何かの動きや様子を表すもののうち、無生物の状態を表すものを「擬態語」、生物の状態を表すものを「擬容語」とし、そして最後に人の心理状態や痛みなどの感覚を表すものを「擬情語」としました。以下がそれぞれの語例です。

- 「擬声語」：わんわん、こけこっこー、おぎゃー、げらげら、ぺちやくちゃなど。
- 「擬音語」：ざあざあ、がちゃん、ごろごろ、ばたーん、どんどんなど。
- 「擬態語」：きらきら、つるつる、さらっと、ぐちゃぐちゃ、どんよりなど。
- 「擬容語」：うろうろ、ふらり、ぐんぐん、ばたばた、のろのろ、ぼうっとなど。
- 「擬情語」：いらいら、うっとり、どきり、ずきずき、しんみり、わくわくなど。

ここで、ある一つの語が、この5つの意味的な分類のうち、2つ以上の意味分類にあてはまる場合があります。

例えば「どんどん」というオノマトペは、「太鼓

をどんどん叩く」というときには、太鼓という物の音を表す「擬音語」ですが、「日本語がどんどん上手になる」という文では、物事の様子を表す「擬態語」になります。

また、「ごろごろ」という語は、この5つの意味的分類のすべてにあてはまる意味を持っています。例えば、「猫がごろごろのどをならす」は「擬声語」、「雷がごろごろ鳴る」は「擬音語」です。そして、「丸太がごろごろ転がる」と言えば「擬態語」ですが、「日曜日に家でごろごろしている」の場合には「擬容語」になります。さらに「擬情語」としては、「目にゴミが入ってごろごろする」という用法もあります。

このように、一つの語がたくさんの意味と用法を持つことがあるというのも、日本語の「擬音語・擬態語」の特徴だと言えます。

(国立国語研究所「日本語を楽しもう」より)

なるほど、同じオノマトペであっても、その使い方によって、さまざまな意味に用いられることがよくわかる。

もうひとつ、『「擬音語・擬態語」使い分け帳』(山口仲美・佐藤有紀著、山海堂、2005年)の後半ページに、小林一茶(1763～1828年)の俳句、俵万智(1962年生まれ)、北原白秋(1885～1942年)の短歌に詠まれた「オノマトペ」のクイズが出題されていたので、正解と他のオノマトペの比較を記した部分を紹介する。なお、「※」の記述は、同書159～178ページから、正解と他のオノマトペと比較を原山が要約したものである。

□□□□と 竹かじりけり きりぎりす

小林一茶

①こりこり／②がりがり／③ぽりぽり／④もぐもぐ／⑤がしがし

※正解は「がりがり」で、かたい物を繰り返し引っ

かいたり削ったり、噛み砕いたりした時などに出る音。「こりこり」は歯ごたえのあるかたい物を噛む時に出る音。適当な硬さなので美味しさを感じる。「ぼりぼり」も煎餅やタクワンなどかたくて軽い物を噛む音で、これも美味しさと結びついている。「もぐもぐ」は物を頬張り、口を閉じたまま何度も何度も噛んでいる様子を表す。「がしがし」は何度もかたい物に荒々しく力を加える音を表す。ここは非力なキリギリスだけれど、挑戦的な「がりがり」が最もふさわしい言葉だった。

□□□□と 君に抱かれて いるような
グリンのセーター 着て冬になる

俵万智

①ふんわり／②こんもり／③がっしり／④たっぷり
／⑤さっくり

※正解は「たっぷり」で、物の量が余るほどたくさんある様子。大きさも暖かさも十分なセーターに包まれる充足感や安心感、物質的な「たっぷり」と心情的な「たっぷり」を表す。「ふんわり」は柔らかく軽い衣類などで包まれる様子を、「こんもり」は樹木や土や雪などがひと固まりになって丸く盛り上がっている様子を表す言葉。「がっしり」は力強くたくましく抱きしめる様子にはふさわしいが、肝心のセーターの質感とはちくはぐな表現。普通は揚げ物が軽く美味しそうに揚がっている様子を表す「さっくり」は「君に抱かれているような」という比喻にはつながらない。

大空に 何も無ければ 入道雲
□□□□□と 湧きにけるかも

北原白秋

①もこりもこり／②むくりむくり／③じわりじわり
／④ぴくりぴくり／⑤ぷくらぷくら

※正解は「むくりむくり」で、うごめきながら段階

的に大きく膨張していく様子を表す。これが「むくむく」だと、連続して盛り上がって脹れていく様子になり、入道雲特有のくびれた雲の感じが出ない。「むくりむくり」なら大きく膨れて一段落し、再び大きく膨れ上がって前の塊に加わる様子がよく出ている。「もこりもこり」も大きく膨らんで見える様子や丸みを帯びてやわらかそうな様子だが、湧き上がる入道雲の勢いを表すのにはやや不足。

「じわりじわり」は目立たないながらも少しずつある現象が現れていく様子を表すが、大空を占領していく入道雲の豪快さを表すにはこれも不足。

「ぴくりぴくり」は痙攣したように小刻みに小さく動く様子を表すが、入道雲のダイナミックな動きにはなじまない。「ぷくらぷくら」はやわなかく膨らんで浮いている様子を表すが、これも入道雲の勢いよく湧き立つ動きの変化を伝えることはできない。

ここで、オノマトペ談義から、ちょっと脱線。

「古池や蛙 (かほづ) 飛びこむ水の音」(季語は蛙、季節は春)は、松尾芭蕉の秀句である。ドナルド・キーン(アメリカ生まれの日本文化研究者)と、小泉八雲人(ギリシャ生まれの日本研究者)が、この名句を英語に訳している。

The ancient pond A frog leaps in The sound of the water.
(ドナルド・キーン訳)

Old pond - frogs jumped in - sound of water.

(小泉八雲=ラフカディオ・ハーン訳)

いずれも、その情景が目に浮かぶ英訳だが、いかにも逐語訳すぎて、味わいに欠けるように思う。

最近の例では、第19回 伊藤園英語俳句優秀賞を受賞した「英語俳句(HAIKU poem)」がある。

Spring is here/Buds opening up/I got new shoes

春が来た/蕾が開くよ/私には新しい靴

(第19回 伊藤園英語俳句優秀賞、2008年)

たしかに HAIKU poem (HAIKU 風の英語短詩) ではあるが、「俳句」の風情(わび・さび)としては今ひとつ物足りないような気がする。

しかし、前回のコラムで引用した石井勲さんの一文(『日本語の再発見』「日本の文字」146 ページ)を、「中国」を「英語圏」に、「漢字」を「オノマトペ」に、「言葉」を「感性(皮膚感覚)」に、「文字」を「からだことば(身体文字)」入れ替えてみると、それぞれの言語圏には特有の感性(皮膚感覚)があり、おそらく、英語圏の人々には「HAIKU poem」特有の味わいがあるのかもしれない。

英語圏のオノマトペは、英語圏の感性を表した「からだことば」であり、日本の「オノマトペ」は日本の「感性」を表した「からだことば」である、と割り切って考へた方がよい、と思ふのである。

閑話休題!

最後に、日本の短い定型詩(和歌、俳句、短歌)に詠われた「オノマトペ」を味わってみよう。

☆「和歌(万葉集)」のオノマトペ

沫雪の ほどろほどろに 降り敷けば 奈良の都
し 思ほゆるかも

沫雪保杼呂保杼呂余零敷者平城京師所念可聞
大伴宿禰旅人(万葉集、卷八 一六三九)

☆「俳句」のオノマトペ

梅(むめ)が香に のつと日の出る山路かな
松尾芭蕉

春の海 終日(ひねもす)のたりのたりかな
与謝野蕪村

ざぶりざぶり ざぶり雨ふる枯野かな
夕風呂の だぶりだぶりとかすみかな
艸山(くさやま)の くりくり晴れし春の雨
うそうそと 雨降るなかを春の蝶

ほちやほちやと 藪あさがほの咲きにけり

小林一茶

☆「自由律俳句」のオノマトペ

へうへうとして水を味ふ
朝湯こんこんあふるるまんなかのわたし
てふてふひらひらいらかをこえた
もりもりもりあがる雲へ歩む
つるりとむげて葱の白さよ
うらうらほろほろ花が散る
どかりと山の月おちた

種田山頭火

☆「短歌」のオノマトペ

白菜が赤帯しめて店先にうっふんうっふん肩を並べる
ふうわりと 並んで歩く 春の道 誰からも miral
たいような午後
自転車のカゴからわんとはみ出してなにか嬉しい
セロリの葉っぱ

俵万智

うらうらと天に雲雀は啼きのぼり雪斑なる山に雲
いず

ほがらほがらのぼりし月の下びにはさ霧のうごく
夜の最上川

死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはず天に
聞こゆる

しんしんと雪ふるなかにたたずめる馬の眼(まな
こ)はまたたきにけり

あかあかと一本の道とほりたりたまきはる我が命
なりけり

斎藤茂吉